

「生命力あふれる文章」を書くための文章指導

― 三段階の文章指導を通して ―

一 はじめ

文章を書くことの重要性は誰もが認識しているものの、いざ書くとなると「何を書いたらいいかわからない」「どう表現したらいいかわからない」という生徒が多い。生徒に限らず我々大人でも文章を書くことは億劫なことであると思っている人が多いのではないだろうか。

本校では、国語総合において表現分野の領域を設け作文指導を重要視しているものの、文章指導の時間を割いて指導することができていないのが現状である。時間的な問題もあるが、教員の側に作文の指導法がわからない、指導が億劫である等の問題点があるように思われる。私自身、個人の入試の小論文指導は行うものの、クラス単位の一斉指導についてはどうしたらよいか困っていた。生徒もどのように文章を書いていったらいいのかわからない生徒が多かった。そこで段階を踏んで文章を指導することで、生徒が効率よく文章表現できるようになる方法はないかと模索した。

生徒には文章力をつけさせ、文章を書く喜びを味わわせたい。また、文章指導を段階的に行う中で、「自分らしい文章」とは何か、「生き生きとした文章」とは何かをも考えさせたい。「自分の思い」「自分らしさ」がうまく表現されたとき、その文は生き生きとしたものになるはずである。その段階を通して、文章を読んだ人々から共感を得られる文章を書くことを究極の目標とした。そのことがテーマでもある「生命力あふれる文章」ということになり自分自身の生き方、考え方にもつながると考えるからである。

二 研究方法

本研究は次のように進める。

生徒の実態調査（意識調査、予備実践） 仮説設定 授業計画
授業実践 アンケート結果 考察・まとめ

〇〇〇立〇〇〇〇〇〇高等学校 〇〇〇〇〇〇 (国語科)

(D) 意識調査

・作文についてのアンケート（平成十八年九月実施）
一年 組（名 男子 名、女子 名）（回答数 名）

1	作文を書くことは得意ですか。	得意 3%	どちらかという得意 6%	どちらでもない 23%
		どちらかという苦手 28%	苦手 40%	
2	(1)で と答えた生徒(理由を教えてください。複数回答)書き方がわからない 37% 何を書いたらいいかわからない 52% まとめ方がわからない 12% 文章の組み立て方がわからない 5%			
3	将来、作文を書かなければならないことがあると思いますか。	思う 34%	どちらかというと思う 35%	どちらでもない 13%
		あまり思わない 10%	思わない 8%	
4	将来のために作文を書けるようになった方がいいと思いますか。	思う 49%	どちらかというと思う 34%	どちらでもない 11%
		あまり思わない 1%	思わない 4%	

(E) 予備実践

・テーマ型小論文(字数六百字以内・五十分)を書く。

タイトル:「校則は必要か」 「年賀状は必要か」

「優先席は必要か」 「死刑制度は必要か」

実施時期 平成十八年九月実施

対象 一年 組(名 男子 名、女子 名)

内容 一切の指導を行わずに指導者があげたタイトルの中から自分で書きやすいと思えるものを選び作文を書かせた。

ねらい 生徒の作文の状況を把握する。

三 分析考察

事前のアンケート結果から、将来、作文を書かなければならないことがあると思うか、という問に対し、「思う」「どちらかというと思う」と答えた生徒は79%となっており、作文を書くことの必要性を認めている。さらに将来書けるようになった方がいいか、という問に対しても83%の生徒が書けるようになりたいと答えているものの、文章を「書くことが苦手」「どちらかというと苦手」と答えた生徒の37%の生徒は「何を書いているかわからない」と答え、52%の生徒は「書き方がわからない」と答えている。書かれた文章を分析してみると、名中 名(78%)が結論を先に持つてくると言う構成だった。(例、私は校則は必要だと思う。なぜかというところ、結論を説明するだけで文章が広がらない、つながらない、また、同じことを繰り返ししてしまうという状況がみられた。だから文章が単調になつてしまつ。さらに一般的な話のみに終わつてしまつたため読み手の心に響かず、面白味のないものとなつてしまつている。)

三 研究仮説

(一) 仮説

作文の必要性を認めつつも「何を書いているかわからない」と回答した生徒に対して

予備実践では
「結論を先に持つてきている」文章構成が大半であった
だから仮説では

「体験・エピソード」を入れさせる指導をする。

この指導で自分と作文との間に現実的な関係が生まれる。
(作文に興味がわき、次に書くことや展開を思いつきやすい。さらに完成した作品に生徒の現実が書き込まれていることで生き生きとした文章となる)

作文の必要性を認めつつも「どう書いていいか、組み立てがわからない」と回答した生徒に対して

予備実践では
「結論から肉付けし、同じことを繰り返し述べる」文章書きがち
だから仮説では

構成法として「三段落構成」を取り上げて指導する。

三段落構成で文章をまとめさせるメリットは、作文が苦手な生徒にいきなり字数の多い作文を求めることはできない。六百字程度の作文から始めるが、三段落構成ならば、この字数でもきちん構成できる。

作文が苦手な生徒でも、きちんと結論に至る文章を意識しながら組み立てることができやすい構成法である。
最初にエピソード、次に反論を意識して自分の考えを述べたり、話の展開を変えたりした後結論という流れにのることで作文の苦手な生徒も円滑に進めることができる。

(二) 生命力あふれる文章について

研究テーマとして「生命力あふれる文章指導」をかかげたが、私の考える「生命力あふれる文章」とは、「自分らしさ」を文章で表現することができることである。それができれば文章は魅力的なものとなり、読む人を惹きつけることができるようになる。そこで、この「自分らしさ」を表現するために、生徒自身の体験、経験に基づくエピソードを盛り込み、作文を構成していくという実践を試みた。この実践の中で書かれている作文には、生徒の実生活の一端やその時々の実感が書き込まれることになる。そして、そこから論旨が展開していくという構成もある。この実践では、作文は、生徒の実態の伴わない言葉の組み合わせではない。生徒達には、実践を通して、自分を文章で表現することで文章を書く楽しさを知ってもらえればと考える。

四 授業実践計画
D 授業計画

第三段階	第二段階	第一段階	
コラム型	課題型	テーマ型	
<ul style="list-style-type: none"> ・コラムを理解して文章を書くことができる。 ・読み手を意識した魅力ある文章を書くことができる。 ・他の生徒の文章を読み評価規準に従って評価をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文章の内容を読みとり、それに対して自分の考えを文章にまとめる。 ・構成を工夫して自分の考えを文章にまとめる。 ・他の生徒の文章を読み評価規準に従って評価をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文章を書くことになれる。 ・三段落構成を理解して書く。 ・生き生きとした文章を書く。 ・他の生徒の文章を読み評価規準に従って評価をする。 	目 標
<ul style="list-style-type: none"> ・読み手を意識した魅力ある文章を書かせる。 ・魅力的な文章とはどういうものか考えさせる。 ・文章表現の楽しさを味わわせる。 ・他の生徒の文章に対し評価規準に従って的確に評価をさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題内容を把握し、それに対し自分の意見をどう関連づけていくのかを考えさせる。 ・生き生きとした文章を書くことを心がけさせる。 ・他の生徒の文章に対し評価規準に従って的確に評価をさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文章を書くことが苦手だと答えた生徒に対し、文章を書くことになれさせる。 ・生き生きとした文章とはどういうものか考えさせる。 ・他の生徒の文章に対し評価規準に従って的確に評価をさせる。 	指 導 上 の 留 意 点
<p>コラムを理解し、文章の面白さを理解して書くことができる。</p> <p>読み手を意識した生き生きとした文章を書くことができる。</p> <p>発展的三段落構成を理解して書くことができる。</p> <p>原稿用紙の使い方や文体などを工夫して書くことができる。</p> <p>他の生徒の文章を読み評価規準に従って評価することができる。</p>	<p>文章を読みとりそれに対しての自分の考えを文章にすることができる。</p> <p>三段落構成を理解して書くことができる。</p> <p>生き生きとした文章を書くことができる。</p> <p>原稿用紙の使い方や文体などを工夫して書くことができる。</p> <p>他の生徒の文章を読み評価規準に従って評価することができる。</p>	<p>生き生きとした文章を書くことができる。</p> <p>三段落構成を理解して書くことができる。</p> <p>原稿用紙の使い方や文体などを工夫して書くことができる。</p> <p>自分の考えをもとに意見文を書くことができる。</p> <p>他の生徒の文章を読み評価規準に従って評価することができる。</p>	評 価 規 準

①指導者の役割

作文の苦手な生徒を中心に、どうしたら文章を書かせることができるかということ考えた。その結果、三段階（導入、発展、応用）に分け、徐々に文章力をつけることとした。最終的には文章表現の楽しさを味わわせたいと思っている。

まず、第一段階の「テーマ型小論文」では、書くことになれることを主眼においた。テーマに沿って自由な自分の意見や体験を入れられ構成することができ、反論予測も常に自分の文章を中心に考えて良い。導入部分として適当であると考えた。

第二段階の「課題型小論文」では、まず先にあるのは課題の内容である。その内容をどのようにとらえ、自分の意見と関係づけていくかが新たに問われる。注意すべきは、課題と同じタイトル・テーマで文章を書くことではなく、課題内容とどのように関連付けて三段落構成でまとめるかということであり、この課題内容を反映した構成を考えさせたい。

第三段階の「コラム」については、第一・第二段階が、自分の文章を構成すること自体に重きを置いていたのに対し、最終段階として読み手を意識した自分らしい文章構成を目指すこととした。すべての段階で「生き生きとした文章」を意識して取り組ませ、文章表現の楽しさを知ってもらいたい。

五 授業実践

①第一段階 「テーマ型小論文を書かせる。」

テーマ「校則は必要か」「年賀状は必要か」「優先席は必要か」

「死刑制度は必要か」（自分が書きやすいと思ったものを二つ選択）

ア 小論文のテーマの設定

導入段階としては作文に対する苦手意識をなくさせ、文章を書くことはさほど難しいことではないということを理解させたい。文章を書くことが苦手な生徒はまず、骨組みを組み立てることができていない。骨組みが決まれば文章を書くことはさほど難しいことではないということを理解させる。そしてワークシートをもとに、「序論」「本論」「結論」の三段落構成にのっとり文章を組み立てさせる。結論をどうするのかによって当然、「本論」「序論」が決まってくるた

めテーマに対してどちらの立場に立つかを明確にさせる。テーマについては生徒の身近にあるものを取り上げた。テーマの設定からすでに、作文の苦手意識を薄れさせる工夫が必要であると考えた。

イ 評価規準

生き生きとした文章を書くことができる。（書く能力）
三段落構成を理解して書くことができる。（知識・理解）
原稿用紙の使い方や文体等を工夫して書くことができる。（知識・理解）
自分の考えの根拠を示した意見文を書くことができる。（知識・理解）
他の生徒の文章を読み、評価をすることができる。（関心・意欲・態度）

ウ 授業実践一

平成十八年十月 一年 組（名 男子 名、女子 名）

組（名 男子 名、女子 名）

本来、三段階の指導として設定したが、第一段階のみを一年生クラスを対象に国語総合の授業で実践した。

時	1	2 3	4
指導上の留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・ コラムを読み聞かせる。 ・ 文章で読み手を惹きつけるため、体験およびエピソードの効果を考えさせる。 ・ 三段落構成を説明し、まずは結論組み立て法のワークシート 資料1 を使い文章の構成を理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ワークシートをもとに作文を書かせる。テーマは「校則は必要か」「年賀状は必要か」「優先席は必要か」「死刑制度は必要か」の中から一つ選ばせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一、二、七名の班作りをし、他班の生徒の作文を読ませる。 ・ 一つの作文を六分程度で読ませ評価をさせる。時間を決め、六作品を回し読みし、評価票 資料2 に記入させる。各班毎で話し合い優秀作品を決め、発表させる。優秀作品の中から一つ最優秀作品を生徒の挙手で決め、どういふ点がいいのか話し合わせ、発表させる。

資料1 ワークシート(例)

ワークシート 題名「年賀状は必要か」

序論

エピソード、特に自分の体験を書き出しに持ってこよう。途中に会話文があると臨場感が出る。また書き出しが会話文だと印象的になる。
体験がない場合、読んだ本、聞いた話で印象に残ったものを持ってきてよい。

・友人からもらった手書きの年賀状。

本論

反論に答える次のような書き方もある。
・たしかに……ですが……。
・しかし、……という考え方もある。
社会とのつながりを書く(自分だけのことではなく、社会でも同じことがあるはずだ。)'今の社会では「日本では」他の国では」などと、考えを外へひろげてみよう。
・メールは届いたらすぐに返せるなど便利な点があるが年賀状はその人の思いが文字に映っているような気がする。

結論

自分の考えをしっかりと述べる。(だからこう思う)
・こういう時代だからこそ人の直筆の年賀状は大切である。

資料2 生徒の評価票

一年組 番氏名
題名

(作文番号)「
エピソードはおもしろかったかどうか。
全体を通して「共感した」「納得した」かどうか。その理由を書く。
書き方のよいところを見つけよう。
「……で読みやすかった。」「……で場面が想像できた。」等

資料3 生徒の作品「年賀状は必要か(指導後)」

私の家では年末になると葉書を買ってきて家族全員で年賀状を書く。毎年恒例で、私も小さい頃からずっと書き続けている。その年によって葉書を出す人が違ったりと変動するが、住所を聞くのも楽しいものだ。
しかし、最近では葉書ではなくメールで済ませる方法もある。葉書がお金や手間がかかるのに対し、メールはあまりお金も手間もかからない。更に一斉送信で複数の人に同じ内容で送れたり、デコレーション等の自分なりのアレンジを加える事も出来る。一言にデコレーションと言っても種類が多くバリエーションに富んでいるので、送信相手のイメージや好きなモノにあわせられる。これらの理由もメールで挨拶を済ませようと考える一つの理由だ。

こう考えると、確かに年賀状を書くのは面倒かもしれない。だが、私は年賀状を書く良い点もあると思う。一枚一枚内容を考えたりするのは勿論だし、日頃携帯を使っているからこそ文字を書くことは必要だ。また、友人からの年賀状を読むのも楽しい。一人一人が自分宛に書いてくれたと思うと嬉しくなるだろう。それに年賀状は日本文化の一つでもある。正月だけにしか書く機会がないのだから、書いた方が良いのではないだろうか。葉書は毎年絵柄も変わるし、何より一生残しておくことが出来るのだ。私は年賀状での挨拶は必要と主張すると同時に、これからも書き続けるつもりだ。

工 生徒の相互評価

生徒の相互評価については、六、七名で班分けを行い、机を向かい合わせにさせ、それぞれの班に他の班の生徒の六作品と評価票を配布する。(作文には番号のみをふって誰の作品かわからないようにする。)六分間で一つの作品を読み感想を書かせ、時間がきたらこちらの合図で作文を回し合い、交換させた。今回は作文の苦手な生徒に対しての導入部分でもあるから大まかな評価票とし、なるべく良かった点をあげるように指示した。

オ 小論文の評価の実際と考察

指導者は、相互評価を行う態度と作品の完成度を個別に評価した。今回は導入段階ということもあり、文章を書かせることに主眼を置いたが、ほとんどの生徒がワークシートを活用し、三段落構成にまとめ上げていた。生徒は、序論に体験、本論に反対意見を想定した上で自分の考えを述べ、結論を展開するというような「型」にはめることで文章を書きやすかったようだ。体験やエピソードを書くというのを理解させ実施したが、体験をうまく表現できた生徒はあまりいなかった。体験を具体的に生き生きとふくらませるということが理解できなかったようだ。

授業については想像以上によく取り組んでいた。作品を読み上げる際にも良く聞いていたし、各班毎の優秀作品を決める際には盛り上がりを見せていた。

代表作品として取り上げた意見文(資料3)に対する他の生徒からのコメントは

- ・エピソードはもう少し長い方が良いと思った。話の筋はあって良かった。
- ・エピソードももう少し内容が濃いと良くなると思う。
- ・三段落に分けられていて良かった。エピソードがもっとふくらむと良いと思う。

この生徒の作品に見られるように、序論で体験は述べられているものの、その体験がふくらまされておらず、生き生きしているとは言えない。その傾向は他の生徒にも見られた。

作文を書くことが苦手だという生徒の「何を書いていいかわから

ない」は「体験・エピソードを入れていいんだ」ということを教えることで解消され、また、「どう書いていいかわからない」という生徒は「三段落構成」にすることで文章が整理された。このことにより文章の苦手意識を薄れさせると同時に「体験・エピソード」と「三段落構成」を意識することで「生き生きした文章」につながるという実感を得るきっかけになったと思う。

【第二段階】課題型小論文を書かせる。

ア 課題文の選定

第一段階のテーマ型で文章を書くための導入を行った。第二段階の「課題型小論文」では、まず先に課題の内容を提示する。

その内容をどのように捉え、自分の意見と関係付けていくかが、新たに問われる。注意すべきは、課題と同じタイトル・テーマで文章を書くことではなく、課題内容とどのように関連付けて三段落構成でまとめるかである。だから、題名についても独自の考えで書くように指示した。この段階での学習活動は第一段階に対しての発展と捉えている。第一段階では型にはめて論述することで、生徒たちは、「結論」から「本論」の展開、さらにその展開の発端となる「序論」を考えるとという構成パターンを具体的にイメージすることができた。今回の「本論」部分においては反論を必ずしも書くのではなく、「序論」をうけて色々な考え方で書いて良いとした。課題を三つ設定したのは第一段階同様、自分が理解した課題、共感した課題を選べるようにしたからである。

イ 評価規準

文章を読みとり、それに対しての自分の考えを文章にすることができる。

(書く能力)

三段落構成を理解して書くことができる。

(知識・理解)

原稿用紙の使い方や文体などを工夫して書くことができる。

(書く能力)

他の生徒の文章を読み、評価をすることができる。

(関心・意欲・態度)

ウ 授業実践二

平成十九年六月 三年生

クラス() 名()

第一段階は昨年度、一学年の国語総合の授業で実践し、生徒が体験やエピソードを入れた三段落構成の文章指導は、課題作文を書く際に有効な手段であることを確認した。本年度も引き続きこの授業計画を実践するため三年生の国語表現の講座を担当した。三年生の選択講座ということで、授業実践の結果を検討した後、第一段階のテーマ型小論文を新たに実践することとした。

三年生の選択講座ということもあり、生徒達は、やはり表現分野全般に対し、興味・関心が高く、取り組みも熱心であった。しかし、作文などを見ると、昨年度同様、きちんとした構成が組み立てられなかったり、論旨の展開が上手くいかなかったりした生徒が意外に多く見受けられ、生徒が「書くこと」に対する苦手意識を持っていることもわかった。そこで、第一段階の実践を行い、昨年度の継続として学習指導計画を実践することとした。

指導上の留意点

時	指導上の留意点
1	<ul style="list-style-type: none"> ・課題文(三種類) <ul style="list-style-type: none"> 「劣等感のない人間なんていやらしいよ」 資料4 「消費社会は未成熟青年をつくる」 「完全に『個』の時代に突入した」を用意し、その中で書きやすいと思われる文章を選び、書かせる。 ・課題文の作者の主張を読みとり、ワークシート 資料5 に主張をまとめ、それに対しての自分の考えを結論に、自分の体験を序論に組み入れながら三段落の構成にさせる。
2 3	<ul style="list-style-type: none"> ・それをもとに肉付けしながら文章を書かせる。
4	<ul style="list-style-type: none"> ・各班毎(六、七名)に分かれ、他の班の生徒の文章を読み、評価 資料6 をもとに相互評価する。 ・評価の高かった文章を読み、いい文章とは、魅力的なエピソードとはどういうものか学ばせる。

資料4 課題文(例)
(次の文章を読み、意見を六百字以内でまとめよ。)

劣等感のない人間なんて、いやらしいよ

もう、二十年前のこと。一人目の息子が脚に少しハンディキャップを持って生まれてきた。そのことでこの子が劣等感をもって生きるようになったらとても不憫だ、と私は思い続けていた。あるとき、友人にそれを言ったら、彼女がこう言った。

「劣等感のない人間なんて、いやらしいよ」

ああ、ほんとうにそうだ。その友人の言葉は強い光のように私を射した。劣等感にひしがれて人格が歪んでしまうのは困るけれど劣等感をかけらも持たない人間なんて、確かにいやらしいし、また、おそろしい。

そして、後年。小学生になったその息子に、私がなにげなく「体育は苦手でしようけど」と言いかけたら、彼は「えっ、ぼく、体育苦手じゃないよ」と響き返した。そのときも、私は(ああ)と思った。私のセンスでは、成績がよくないことイコール苦手とらえていたのだけれど、彼にとつては、出来る、出来ないというわけではないし、苦手と言うこともない。出来が悪くてもだから嫌いというわけではないし、苦手と言うこともない。そのことでは、当時の担任の女性の先生のお陰とされているのだが、かけっこをして、他の子との差が去年より少しちぢまったことをみんなで気づいて喜んでくれるようなクラスだった。

そしてまた、中学の時。「マラソンで、僕はみんなの倍も時間がかかってしまったんだよ」とため息をつく彼に、彼の兄がこういった。「そんなに長い時間走り続けられたなんて、すごいじゃないか。えらいと思うよ。」彼によつて、私は自分にはない見方につきつき出会わされてもらってきたようだ。

伊藤雅子『女のせりふ120』より

資料5 ワークシート「劣等感のない人間なんていやらしいよを読んで」

ワークシート 「劣等感成長のきっかけ」

「作者の主張」

・成績が良くないイコール苦手と捉えていたが障害を持っている子供から違う見方を教えられた。



エピソード、特に自分の体験を書き出しに持ってこよう。途中に会話文があると臨場感が出る。また書き出しが会話文だと印象的になる。体験がない場合、読んだ本、聞いた話で印象に残った話を持ってきてよい。

・理数科目が苦手な劣等感をもっていた。



・劣っているからこそ、それを克服しようとする努力する。



自分の考えをしっかりと述べる。(だからこう思う)
・劣等感を成長のきっかけとした。

資料6 生徒の評価票

三年 組氏名

国語表現評価票

作文番号 ()

- 1 エピソードについて a a b c d
- 2 三段落構成について a a b c d
- 3 誤字、脱字、原稿用紙の使い方等 a a b c d
- 4 論理的か a a b c d

総合評価

A 大変良い B 良い C 普通 D もう少し頑張れ

コメント (具体的に)

・なるべく良い点をみつけよう。

・面白かった」「共感した」「納得した」などを入れ、その理由も書く。

資料7 生徒の作品「劣等感成長のきっかけ」

私には苦手な教科がある。私はどちらかといえば文系で、数学や理科が昔からあまり得意ではなかった。成績も伸び悩み、どうして私だけが思うこともしばしばあった。周りの子と自分を比べて劣等感を感じ、すごく落ち込んだものだ。それから言うものは、少しでも苦手教科の成績を伸ばそうと勉強した。昔と比べれば少しずつ伸びてきたように思える。

そもそも劣等感とは、自分が他人より劣っていると感情のことらしい。大勢の人がこの「劣等感」と言う言葉に少なからずともマイナスのイメージを持っているのではないだろうか。私はそうである。言葉に対し、あまりよい感じがしないのだ。多分、ほとんどの人が「劣等感」よりも「優越感」を選ぶと思う。しかし、本当にそれで良いのかと聞かれれば必ず肯定する、と言うことは私にはない。それは劣等感を感じることで成長するからだ。人よりも劣っていると意識があることで、それを克服しようとする努力する。努力すればするほど、実力は結果になって現れる。ただ、優越感に浸るよりも大変だが、苦労した分は「自信」に姿を変えるのだ。そう考えると、それ程マイナスイメージではなくなるだろう。

劣等感を成長するキツカケと考えるのは少し難しいかもしれないがそれがあってこそ人間である。人間に対しての一つの材料であり、成長につながるに違いないのだ。

工 生徒の相互評価

生徒の相互評価については第一段階と同様に班分けをして実施し前回の反省を受け評価票の項目を増やし、具体的に評価ができるようにした。しかし、abcdの記号のみであったため、それぞれの班で評価規準がまちまちになる傾向が見られた。友人の作品を評価することについては、意欲的に取り組むのだが、実際にどのように評価すべきか戸惑う生徒も見受けられた。きちんと評価させることの難しさを感じた。

オ 小論文の評価の実際と考察

指導者は、相互評価を行う態度と作品の完成度を個別に評価した。前回、エピソードを書くということが理解させ実施したが体験やエピソードを書くということがうまく伝わらなかった。ところが第一段階の相互評価時に作文を読み、体験やエピソードがイメージができた生徒が多く、そのことが今回の作文に反映された。

授業の様子については、少人数ということで気軽に「どう書いていいかわからない」とか「何を書くんですか」など聞いてくることもありそれに答えることで和やかに進められた。

生徒作品 **資料7** の評価票には次のような意見があった。

- ・エピソード部分は共感できるし良かったと思った。
- ・劣等感を感じることで成長するという考え方はいいと思った。
- ・組み立てがしっかりしていてよかったです。

全体的傾向として第一段階で三段落構成を学習しているため組み立てについてはさほど問題がなかった。さらに体験、エピソードも具体的に表現することができるようになった生徒が増えたという印象を持った。ただ、第一段階の本論部分では反論を予測して自分の考えを述べるとしていたため書きやすかったが、今回はなるべくそれにとらわれずに書くよう指示したこともあり、どう書いていいかわからなくて戸惑った生徒もいた。

③第三段階 「コラムを書かせる。」

ア 実践準備

第三段階の「コラム」については、第一・第二段階が、自分の文章を構成すること自体に重きを置いていたのに対し、最終段階として読み手を意識した魅力的な文章構成を目指すものである。

第一段階、第二段階は入試やレポートなど必要に迫られて書く文章といえる。それに対してコラムは自分の自由意思で書く場合が多い。普段、生活の中で見たり、聞いたこと感じたことをテーマとし、文章にすることの面白さを味わわせたい。生徒は第一段階、第二段階で「型にはめる」ことで文章への苦手意識が薄れ、書けるといふ実感を持ち始めた。三段階では基本を残しつつ、少しずつ型を緩めることで生徒が自由な文体で書けるようになる方向へ発展的に

指導することとした。文章構成については新たに「起承転結」を教え、字数についても六百字を越えても良いこととした。コラムは色々な文章パターンがあるため、「起承転結」にこだわらず、今まで通り三段落構成や発展的三段落構成(序論、本論、結論とは限らないパターン)を用いても良いものとした。

イ 評価規準

読み手を意識した生き生きとした文章を書くことができる。

コラムを理解し、文章の面白さを理解して書くことができる。(書く能力)

起承転結・発展的三段落構成など文の構成を理解して書くことができる。(書く能力)

原稿用紙の使い方や文体などを工夫して書くことができる。(知識・理解)

互いに文章を読み合い、生徒同士で文章を推敲し、向上することができる。(関心・意欲・態度)

ウ 授業実践三

平成十九年九月 三年生 クラス() 名()

時	1	2 3	4
指導上の留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・コラムについて学習させる。新聞のコラムを読ませる。(コラムとはどういうものか。今までの文章との違いを確認する。) ・「起承転結」について学ばせる。 ・今までの「序論」「本論」「結論」の三段落構成にこだわらない形の文章構成を発展的三段落構成と名付け、「発展的三段落構成」「起承転結」のどちらかで書いても良いものとした。 ・ワークシートをもとに文章の構成を行なう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文章を書かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各班毎(六・七名)に分かれ、他の班員の文章を読み、評価票 資料8 をもとに評価を行わせる。

資料8 生徒評価票

- 国語表現評価票 (作文番号))
- 1 エピソードについて (a 面白い b まあ面白い c 普通 d エピソードなし)
 - 2 三段落構成について (a まとまりで分かれている b 分かれているがまとまっていない c 分かれていない)
 - 3 誤字、脱字、原稿用紙の使い方等 (a 問題なし b 一ヶ所間違い c 二ヶ所間違い d 三ヶ所以上)
 - 4 論理的か (a 筋道がしっかりとしている b まあしっかりとしている c しっかりしていない)
- 総合評価
- A 大変良い B 良い C 普通 D もう少し頑張れ

資料9 コラム 生徒の作品 (例)

「それマジでCSなんだけど・・・」この会話を初めて耳にした時、思わず「はっ」と口にしてしまった。CSとは「超さむい」の略だという。こういった言葉遣いが最近の若者の間で流行っているらしい。この他にも「KY」(空気読めない)や「JK」(女子高生)などといった言葉(言葉と違って良いのか)があるみたいだ。私は若者のはずなのに、全くその意味が分からなかった。

学校や家では、よく「言葉遣いには気をつけるんだよ。」と言われる私も将来、社会に出た時のために、普段から気にするようにしていることもある。しかし、最近の若者は「気持ち悪い」を「キモイ」とか先にも書いたような省略言葉を使ってしまふのだ。だから、その流れで目上の人や先生と喋った時、大人はどう感じるのだろうと不思議に思う時がでてくるのである。

日本人は昔から「言葉」を大切に生きていて、と何かで聞いたことがある。しかし、今は若者によって、その気持ち薄れてきてしまっているのではない、と思えてきた。自分を含む若者は、いろいろな最先端を求めているので良いとは思って、日本人である限りやはり、言葉遣いをもう一度振り返って見た方が良いと感じた。

工 生徒の相互評価

評価の時間がすっかり定着し、生徒は主体的に友人の作品の評価に取り組むようになった。前回の評価表の評価規程がわかりにくいという反省点を考慮し、今回は項目毎に具体的な規程を設けた。その結果、生徒は、よりの確な評価ができるようになった。

オ 小論文の評価の実際と考察

第三段階ということもあり全体的に向上が見られた。体験やエピソードの出し方も第一段階、第二段階よりも、惹きつけられるような内容が多くなった。それを受けて本論部分では話題をふくらませたり、展開を変え発展させたり等、色々な構成が見られた。第一段階、第二段階と比べても、文章としてのまとまりや、文章力の向上が見られた。第一段階では、「型にはめる」ことで、ある程度、形式的な文章になったが、「型を緩める」ことで自由な文章、自由な発想へと発展した。

生徒作品 資料9 の評価のコメントについては

- ・最近、流行している言葉の話題ですんなり入っていけました。全体的にわかりやすい、共感できる内容で良かったと思います。
- ・若者の言葉遣いを通して、自分自身も使ってしまうことがあるがそれに対して大人はどんな風を感じているのかなどの疑問を投げかけて結論を出していたのでわかりやすくてよかったです。

生徒作品を見ると、序論部分の体験は具体的でわかりやすく、臨場感あふれるものとなっており、本論の部分の展開も序論部分を受けながら幅を広げていっている。結論部分には日本人として言葉遣いの再認識を打ち出しうまくまとまっていて、「生き生きした文章」に近い作品といえる。

最終段階としてコラムを設定したが、コラムがどういうものであるかということを理解することが出来ず、先へ進めず困った生徒がいた。コラムの第一回目時、提出が出来なかつた生徒が四名いたが、これまでの作品提出の中では未提出者が最も多かつた。ワークシートに組み立て例をのせてもう一度コラムについて説明をした上で、再度書かせたり、個人的に指導を行った。

四(三)段階の指導後のアンケート結果

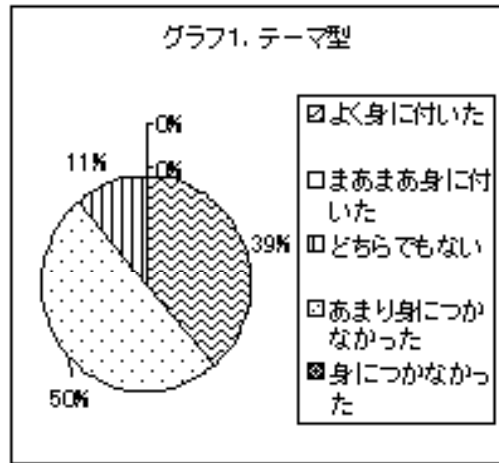
アンケート実施時期：平成十九年・十月

調査対象：第三学年

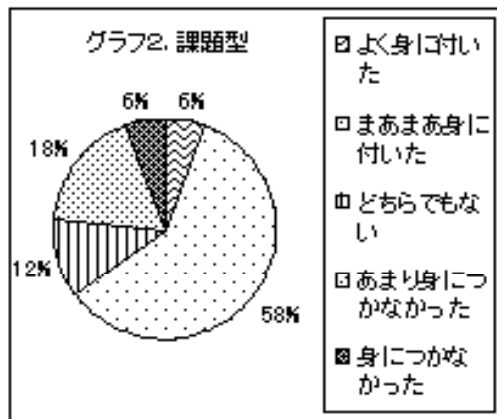
(女子 名)

三段階の指導終了後、以下の六つの項目について、無記名のアンケート調査を行った。これまでの文章指導を生徒がどのように受け止め、どれ程身につけてきたかを知るためである。まず、生徒たちに三段階の授業実践の中で書いてきた自己作品を改めて振り返らせ、次にこのアンケートに答えさせるといふ手順をとった。

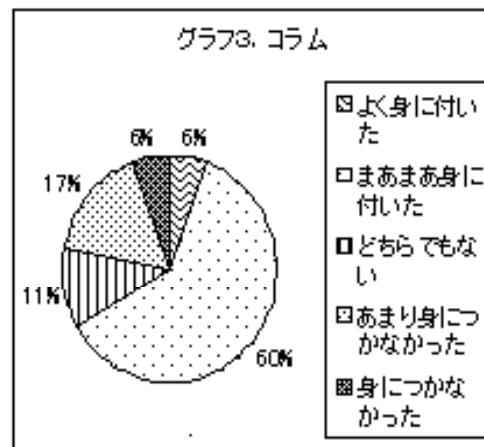
1 テーマ型の文章指導は身に付いたと思うか。



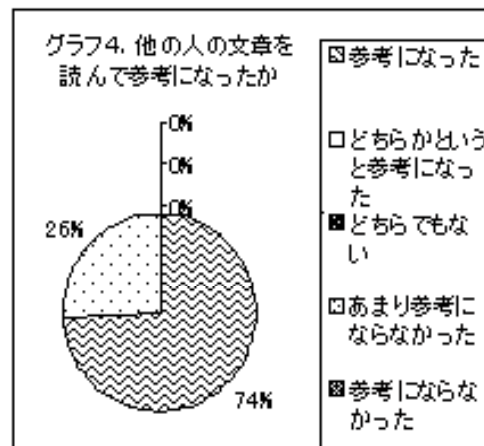
2 課題型の文章指導は身に付いたと思うか。



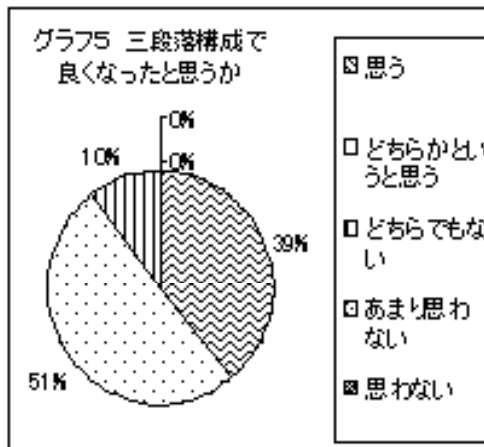
3 コラム型は身に付いたと思うか。



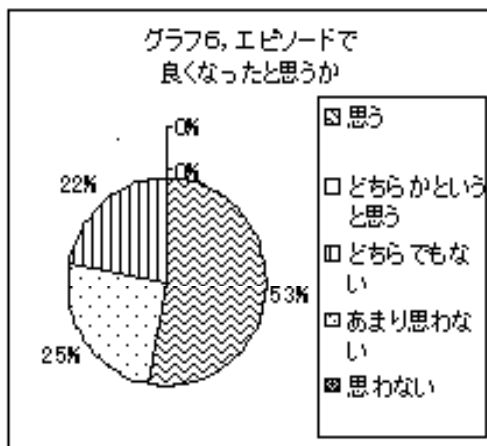
4 他の人の文章は参考になったか。



5 三段落構成で文章がよくなったか。



6 エピソードで文章がよくなったか。



六 まとめ

(一) 三段階の実践について

作文が苦手な生徒に対してまず、「型にはめる」ことによって文章を書くことができるように指導し、徐々に型をはずしながら「自分らしい」魅力的な文章表現を試みさせた。第一段階においてはグラフ1「マ型からわかるように」、「よく身に付いた」、「まあまあ身に付いた」という生徒が約九割いて、導入の「型にはめる」やり方は定着したといえる。ところが、グラフ2の課題型、グラフ3のコラムについては六割程度と減少している。第二、第三段階で、第一段階の「型」を参考にし、より「自分らしい」文章を書くことができるようになった生徒もいた。しかし、「型にはめる」文章構成が緩められ、より自由に「自分らしさ」を表現できるようになると、かえって生徒は戸惑いを感じたことがわかる。「型にはめる」基本的な文章構成法から、より自由な文章構成への段階的指導法がこれからの課題となることが明らかになった。

(二) 生徒の相互評価について

生徒同士の評価において、誤字や段落の分け方などを指摘することはできたが、文章表現や論理的かどうかという点についてはあまり指摘することができなかった。推敲するということは生徒の国語力に負うところが大きく、それを伸ばすことの難しさを感じた。しかし、グラフ4に見られるように「他の生徒の文章を読むことは参考になった」、「どちらかという参考になった」とほとんどの生徒が回答しており、他の生徒の文章を読むことが、文章を書くことへの興味関心に強く結びついていることがわかった。また、自分の文章を、読み手を意識して書くこととしている生徒も出てきたことも、生徒による相互評価の重要性を裏付けているといえる。

(三) 仮説の検証について

仮説において「体験・エピソードを入れること」により、自分と作品との間に現実的な関係が生まれ、生き生きとした文章になる、としたが、グラフ6では、体験、エピソードを入れることにより「文章が良くなった」、「どちらかという良くなった」と八割近くの生徒が答え

七 おわりに

ている。自分の体験からくる現実を表現することで、説得力のある文章となり、読み手に自分の意見が伝わりやすくなったということだ。また、仮説では「三段階構成」を使うことで、作文が苦手な生徒でも、きちんと結論に至る文章を意識しながら組み立てることができ、自分の意見をわかりやすく相手に説明することができる。グラフ5にあるように、三段階構成で「文章が良くなった」、「どちらかという良くなった」と答えた生徒が九割に上っている。これは、筋道を立て、わかりやすく説明ができたことで「文章が良くなった」または「文章力がついた」と解釈した生徒もいたということである。以上のことから、学習指導計画における指導目標は概ね達成したといえ、研究仮説は実際の文章指導において有効であったことがわかった。

「生命力あふれる」と大きなテーマを掲げて、研究をすすめてみた。最初、稚拙だった生徒の文章も第一、第三段階へと進むにつれ、徐々に躍動感のある「生き生きとした」文章になったし、体験だけでなく、本論、結論部分も序論部分を受け、「自分らしい」自由な発想を展開し「生命力あふれる文章」に近づきつつあるという認識を持った。文章指導後の感想の中に「作文を書きなくなった」、「もっと奥深い文章にしたい。」等の回答があったのは収穫であった。さらに「エピソードがないから時間を大切にしたい。」という回答は大変興味深いものであった。文章を書くことが好きになり、文章を書くこととする姿勢（意識）を持つことで物事の見方が変わったり、新鮮なものの捉え方ができるようになり、「生き生きとした生活」につながるばよいと考える。今後この「生命力あふれる文章」について研究を重ねていきたい。最後に本研究をまとめるにあたり、ご指導とご助言を賜りました指導主事の 先生、前指導主事の 先生、教科指導員の 先生、前教科指導員の 先生、教科研究委員の先生方、高等学校の先生方に、この場を借りて心よりお礼を申し上げます。

* 参考文献

達成感のある国語表現の授業 富谷利光 (教育出版)

